

論文の内容の要旨

博士論文題目 身体をめぐるアイデンティティの構築

- ニューヨークにおけるドミニカ系 2 世のダンス実践から -

氏名 三吉美加

本論文は、アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市マンハッタン島北部に居住する若いドミニカ系の 2 世を対象とし、彼/女らが身体実践を通して重層的な視点から自己を認識し、独自に文化を捉えるようになっていく様子を記述・考察する。本論文における「身体実践」はダンスを中心とするが、身ぶり、手ぶり、ジェスチャー、歩行、しぐさなどの動作、また、装飾などの表象も含み、広義に捉えながら論述していく。

本論文の中心となるインフォーマントは、多種多様なエスニック集団を抱える複雑な都市社会ニューヨーク市で生活する若いドミニカ系の 2 つのグループに属する人びとである。1 つめのグループ(「バイラドーレス(仮名)」)は、ドミニカ系コミュニティにおけるアフタースクールプログラムでダンス学習を行なう 10 代から 20 代の参加者である。彼/女らの実態は、「ドミニカ系集団」や「ニューヨークの若者」というような単一で固定的な枠組みではとうてい理解できるものではない。そこで筆者は、「ドミニカ系」「若者」「ニューヨーカー」など若い世代の多様なアイデンティティにダンス実践という共通した特徴があることに着目し、学習するダンス、娯楽やスポーツとして楽しむダンスなど踊る行為に焦点をあてながら観察する。もう 1 つのグループは、ドミニカ系アーティストたちである。彼/女らの存在は、1 つめに挙げたダンス

クラスの参加者のアイデンティティ構築において重要な役割を担っている。彼/女らは、既存のドミニカ文化の捉え方ではなく、ニューヨークでの生活経験によって新しいドミニカ文化の価値を見出し、一般のドミニカ系の中に浸透する文化認識に批判的な態度を示し、ドミニカ系の若者を対象にアフロ・ドミニカ文化のパフォーマンスを紹介したり、ワークショップを開いたりしている。

本論文は結論を含め、7章から構成される。第1章と第2章では本論文の議論部を理解するための基本的な事柄について記述する。第1章では、本論文の目的と問題意識を明らかにし、具体的にどのような問題を検討していくか、先行研究との関連を示しながら言及する。後半部分では、現地調査についての詳細を述べる。第2章では、ドミニカ共和国からニューヨークへ大勢の移民が流入し、コミュニティを形成するに至った経緯、および、ドミニカ共和国の歴史について説明する。第3章以降、インフォーマントたちによる文化に関する説明のなかに、タイノ族、黒人、スペインやヨーロッパに関することがらが出てくることについて筆者は言及するが、その際参照されるのは特定の時代の出来事についてである。そこで、第2章で説明する歴史的事実はインフォーマントたちが重視するものに関してのみである。そして引き続き、現在のニューヨークのドミニカ系社会、母国と移民コミュニティとの関係、エスニック・アイデンティティに関する概要的な記述を行なう。後半では、現在のニューヨークのドミニカ系コミュニティと若い世代について記述する。

第2章から第6章まではニューヨーク市での現地調査のデータ・分析をもとにした記述部および議論部である。第3章では、ドミニカ共和国の歴史がドミニカ系のエスニシティや人種の捉え方にどのような影響を及ぼしてきたかについて考察する。そして、合衆国のドミニカ系によるドミニカ共和国の音楽・ダンスに対する意識が、母国、および2国間の歴史に影響されていることを説明する。後半では、国民ダンスとされるメレンゲについて記述する。そのなかでは、メレンゲの歴史的背景として国家による文化概念の操作を指摘する。本来、メレンゲは様々な文化的影響を受けた音楽・ダンスである。しかし、独裁政権以後、ヒスパニック的なもの（「スペイン的」「ヨーロッパ的」というニュアンスが含まれる）、カソリック的なものとして認識されてきた。現在、メレンゲを国民文化として誇らしげに語るドミニカ系の人はい

が、依然、「純然たるスペイン文化を継承している音楽・ダンス」としてメレンゲは認識されている。

第4章および第5章は、ドミニカ系の日常実践であるダンスについてのエスノグラフィックな記述部である。両章において、インフォーマント、とくにダンスクラス、バイラドーレスの参加者の本質主義的な発言に筆者は着目していく。

第4章はバイラドーレスについて記述する。参加者たちはどのような理由でバイレ（伝統的ダンス）を学習し、バイレをどのように理解しているのか。集団の特徴は何か。筆者も彼/女らとともに練習に参加したが、そのときの経験も含めながら、参加者たちの集団との関わりかた、また、バイレや文化の捉え方を検討していく。その際、バイレ経験を通して、身体実践と人とのつながりの強化に影響されて、バイレおよびドミニカ文化の理解が変容していく様子をレイブとウェンガー（1994）、ウェンガー（Wenger 1998）による徒弟制の研究を参照しながらみていく。しかし、本論文のインフォーマントの学習が彼らの徒弟制をモデルとした事例と比べて、学習の目標が多様である点において異なるため、インフォーマントの学習やそれにとまなうアイデンティティの構築を検証する際には田辺の研究（2003）を参考にし、彼/女らのアイデンティティの多様化と身体実践との関係について検討していく。そして第5章と第6章では、バイレ学習の経験が日常的な動作にどのような影響をもたらすことになるのかに注意しながらみていく。第5章はヒップホップとインフォーマントとの関わりについて記述・考察する。それに先立って前半では、ヒップホップの概要を説明し、若者文化についての先行研究を参照しながら、商業文化としてのヒップホップが及ぼす黒人化の過程を考察する。次に、ドミニカ系2世たちが、コミュニティや地域性を重要視したもう1つのタイプのヒップホップの影響を受けていることを説明する。ここでは、ドミニカ系の若者が同じ地区の隣人アフリカ系アメリカ人、他のカリブ系やラティーノとともにヒップホップに傾倒していく様子を記述する。そして、ヒップホップがバイラドーレスの参加者の意識、踊る行為や特定の振りつけにどのような影響をもたらしているか考察する。

第6章では、第3章から第5章までみてきた若者たちと身体実践の関わりを、彼/女らの言説と身体動作の観察に基づき分析していく。まず「アフリカの」「ドミニカの」などに関する彼/

女らの言説を分析した後、これまで検討してきたバイラドーレスの文化の表現の仕方がアーティストとは微妙にずれること、アーティストの動きや黒人性の認識がバイラドーレスの参加者と異なることについて考える。筆者はそれらの「ずれ」をもたらすいくつかの原因を身体実践に基づいたアイデンティティの構築という観点から具体的に示す。

第7章の結論では、バイラドーレスとアーティストのダンスや身体実践、およびドミニカ文化に関する捉え方の類似と違いを明らかにし、その背景について筆者の見解を述べる。

本論文が明らかにしたことは2つある。1つめは、ダンス実践が個人に豊かな想像力をもたらしたことである。想像力は人とのつながりを意識し、その人間関係のなかに自分を位置づけていく過程で鍛えられていた。想像されたものは、文化の捉え方の説明と身体の表象に表出していた。なかでも重要とされたのは、アフリカ的型として表象された身体動作であった。その際、メディアによる黒人のイメージが借用される。筆者はその理由についても議論する。

本論文において2つめに明らかにしたことは、身体実践が地元意識とそこに根ざす人間関係の大切さをバイラドーレスの参加者に印象づけた点である。同時に、ローカル・ヒップホップによる影響によって、ダンス実践を介した近所の友人とのつきあいから、黒人の文化圏にいるという意識が芽生え、地元意識が強くなっていた。

最後に指摘するのは、バイラドーレスの参加者の文化の捉え方やアイデンティティの変化をもたらした背景としての多文化主義についてである。ASP活動や文化イベントなどで各自のエスニック・アイデンティティの重要性を説かれると同時に、他のエスニック集団の文化を尊重しなければならないという、お決まりの多文化主義の啓蒙スタイルは、音楽やダンスなど身体性を伴う状況で強調されていた。そのような場で、若者たちが見せる反応は、人種やそれ固有と世俗的に認められる身体性であった。その際、非ドミニカ系にとっては習得が困難であると強調されるスタイルは、黒人性を表象するものに集中する。バイラドーレスの参加者たちのアフロ・ドミニカ系アメリカ人、あるいは、ドミニカンヨークとしての帰属意識、すなわち、アイデンティティ(の一部)は、模倣にはじまり、バイレ学習のなかで、ヒップホップのなかで、獲得される言葉と身体性によって表象されるべきものとなる。そうしたやり方によって、彼/女らは多文化主義の影響下で、身体実践の経験に基づいた、彼/女らなりの、解釈した多文化主

義を社会に提示するようになっているのである。